

三菱重工業株式会社  
取締役社長 泉澤清次様

御社におかれましては、「コロナウィルス感染」による影響甚大なるものと拝察し、お見舞い申し上げます。

## 91歳の梁錦徳さん迎え

正義と人権回復を



東京・霞ヶ関の外務省前で支援者とともに抗議の声をあげる梁錦徳さん

月刊イオ 2020.3月号

私たち市民は、感染の1日も早い終息を願っています。そして、国が全面的な生活保障政策をすみやかに実施することを強く要請するとともに、御社をはじめ大企業が、今こそコンプライアンス精神を発揮し、市民社会に貢献する施策を打ち出されることを強く期待するものです。

そして、“謝罪を受けて死にたい…”という梁錦徳さんの訴え（2020/1/17）は、本件解決には延期も中断も許されないことを、御社は肝に銘じなければなりません。

2020年4月10日（金曜日） 名古屋三菱・朝鮮女子勤労挺身隊訴訟訴訟を支援する会

三菱重工は謝罪と賠償で  
明日ひらけ

↑「足を踏まれた者」は、否！そんな生やさしいものではない。心身に針を刺された強制動員被害者は、その痛みを永遠に忘れることはできません。針を刺した加害企業が、その事実を隠し、賠償はおろか、謝罪すらしないとしたら、その企業が掲げる「誠実」「社会的責任（コンプライアンス）」は、「嘘つき企業」という看板に、「転化」するのです。「愛」が「憎しみ」に転化するが如し！

### ▼原告：金性珠ハルモニ（おばあさん）の名古屋高裁結審法廷（2006/12/5）陳述より

「私は初等学校を卒業して家で過ごしていた1944年5月も終わり頃（当時の歳は15歳）、妹の初等学校の担任の大垣先生から、学校へ出てこいと言われ、学校へ行くと友達がすでに3～4名来ていました。先生がおっしゃるには、『お前たちが日本に行けば中学校・高等学校にも行けるし、仕事をしてお金が貰える。そしていつでも帰りたいときは帰れる。だから日本に行きなさい。』ということでした。

私も女学校にあこがれていたし、勉強も続けたいと言う気持ちがありましたので、その言葉を聞いてぜひ日本に行こうと思いました。そしてハンコを持ってこいと言われて、父母に黙って、先生にハンコを渡しました。

5月末頃、順天から麗水に汽車で出発しました。その時に、送ってくれた人たちが歌った歌は、♪勝ってくるぞと勇ましく、誓って国を出たからは、死んで帰れと励まされ♪」と言う歌でした。……私は日本に来て、期待していた学校生活もなかったし、仕事をしていて指を切断し、今でも骨の中まで痛みを感じます。また、地震で逃げる際には耳と足を痛め、今でも足を引きずりながら夜になると横になるのもままならない状態で暮らしています。地震や空襲の恐ろしさは今も忘れることができません。

日本政府、三菱は、このような私たちの、今でも癒されることがない苦痛の多い恨みを分かれますか。…私の人生を返して下さい。日本政府と三菱は私たちのような勤労挺身隊被害者の声に耳を傾け、謝罪と慰労に足る十分な補償を必ずしてくれることを要求します。」

★写真は、大法院判決の即時履行を訴える金性珠原告（2018/11/29：大法院判決後の記者会見）

